

萩原朔太郎全集

第十二卷



萩原朔太郎全集

第十二卷



筑摩書房

萩原朔太郎全集 第十二卷

昭和五十二年十月三十日
初版發行

著 者 萩原朔太郎

發行者 井上達三

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二一八
電話(二九一)七六五一(代表)
振替口座 東京六一四一二三

本文整版印刷 株式會社 精興社
寫眞整版印刷 株式會社 東京美術印刷社
製本 牧製本印刷株式會社

凡例

一、本全集は、萩原朔太郎の既發表、未發表を問わず、詩・短歌・俳句・アフォリズム・詩論・文明論・書評・序跋・書簡・各種ノート等にわたって、全業績を收録することを目途とした。

一、本卷（第十二卷）は、現存する著者「未發表ノート」二十三冊を活字化し、活字化困難な頁は寫眞版として收めた。但し、音楽關係のノート三冊は、便宜上一卷にまとめた。

一、本文は、ノートの原本を底本とし、原型通りに起こすことに努めたが、表題のないものは「○」印を附して表題のかわりとした。

一、本文は正字正假名遣に統一した。

次のような場合、訂正した。

1 明らかな誤字・俗字・脱字

例 信從↓信徒、所詮↓所詮、價致↓價値、亭樂↓享樂、必竟↓畢竟、私自分↓私自身、憶測↓臆測、述信↓迷信、生びた↓帯びた、輪畫↓輪廓、十弍↓十錢、咏嘆↓詠嘆、藝術のため藝術↓藝術のための藝術、等

2 假名遣の誤り

例 思い出↓思ひ出、たえがたい↓たへがたい、そうした↓さうした、あろう↓あらう、等

3 踊り字（々々、く）

4 熟語の片假名書き、片假名混り書き

例 キュ↓鯢鯢・窺窺、ソクタク↓忖度、ケイケン↓敬虔、ケイレン↓痙攣、背ノー↓背囊、發ヨー↓發揚、コー束↓拘束、ザン言↓譏言、等

次のような場合、原文のままとした。

1 著者獨得の用字・用語

例 酸廢、由所、家根、賤辱、敬嘆、發韻、消殺、威權、浸輝、透入、病陷、等

2 著者の造語とみられる語彙

例 捕索、凝晶、熱切、認辨、旬烈、母愛、稀弱、本面目、關類、等

3 送り假名の送り過ぎ、送り足りないもの

例 新らしい、賢こい、鋭どい、短かい、等

ただし、著しく不自然なものはこれを訂した。

4 外來語・外國人名の表記

例 ショーペンハウエル、ショーペンハウワ、ラフエロ、ボドレエル、エルレーヌ、ベトーベン、メロ

デイ、メロザイ、等

5 慣用表記

例 ぼつとかすると、ひつこり、平べっこい、等

一、ノート本文中真順不同の箇所は、これを訂した。本文中の改行、行あき、句讀點はノートの原本を尊重しつ

つも適宜これを補った。

一、本文は原則として抹消部分は起こさなかったが、長文の場合はへでかこんで起こした。

一、本文中、二種以上の語句がともに抹消されず残っている場合は「」でくくった。

例 犬が

柳の木を
墓場の墓標を
めぐつて居る

一、本文中の判讀不可能な字句は、ほぼその字數分の□を置いた。

例 始めは家族的、□□的智が善、等

一、本文には「*」印で編集上の注、「†」印で事實關係の誤りを注した。

一、本巻收録の「未發表ノート」については、巻末に解題を附した。

目次

1

ノ ー ト	一		三
ノ ー ト	二		二九
ノ ー ト	三		五五
ノ ー ト	四		一〇一
ノ ー ト	五		一四七
ノ ー ト	六		一七三
ノ ー ト	七		二二三
ノ ー ト	八		二七三
ノ ー ト	九		三〇三
ノ ー ト	十		三四三
ノ ー ト	十一		三九三
ノ ー ト	十二		四二一
ノ ー ト	十三		四五三
ノ ー ト	十四		四八七

ノート	十五		五七
ノート	十六		五九
ノート	十七		六一
ノート	十八		六四九
ノート	十九		六八七
ノート	二十		七〇五
ノート	二十一		七三五
解題			七五三

第十二卷 未發表ノ一ト篇

ノ
一
ト
一

○ 此頃僕の内部で何かえたいのわからぬ奇異な光が受胎して居る。そいつがだんだんあばれ出す。

併しまだ外壁が厚いので容易に外部へはみ出して来ない。それが非常に苦しい。實際、所産前の窒息的苦惱だ。毎日わけのわからないことを紙片に書いて居る。いよいよセンチメンタルの涅槃が近づいて来たやうに思ふ。天地がまぶしくて瞳がくらみさうだ。九月の太陽は密雲に蓋はれて居る。何をみても輪光がみえる。これは歡喜だ。實に針のやうな苦痛だ。絶息だ。たまらない。

○ ゆうべ久しぶりでエレナに逢つた。エレナとは彼女が浸禮聖號だ。二人で月蝕を見て居た。もう僕と彼女との間には戀はない。併し戀以上の不可思議な愛がある。それは深く考へるときは戰慄すべきものだ。僕はいそいで別れた。部屋へかへつてからまつさになつてゐるへて居た。

○ 詩歌の八月號に出た福士幸次郎氏の譯詩は面白くよんだ。譯詩といふことは最も完全に行はれたところで第二義の藝術的價值しかもつて居ないものだと思ふ。然も譯詩には最も洗練された技巧と最も熱情的の共鳴とがなくてはなるまい。今迄見た多くの例から私は譯詩といふものの藝術的價值(第二義の)を全然疑つて居た。

前號詩歌に發表された福士幸次郎氏の二篇は僕が譯詩といふものにリズムを感じた最初の作である。

○ * 前號詩歌 『詩歌』第四卷第九號(大正三年九月)に福士幸次郎譯「デーメル」の詩」(詩二篇)が掲載された。

○ 今の僕にとつてはあらゆる物象あらゆる

* 「あらゆる物象あらゆる」以下はない。

○ 「幼兒が神になる。」幼兒が幼兒として生長するときにはいつかきつと神になる。成人は到底神になれない。最も賢い成人でも尙聖人以上になれない。あらゆる天才は幼兒が幼兒として生長したものだ。

心は至純でありたい。「幼児が神になる。」天國を見ることの出来るものは幼児より外には居ない。

○

今の僕にとつてはあらゆる物象が「光」だ。あらゆる人が僕の先輩だ。至純の心は芽生のやうに生成してゆく。あらゆる光と人とはぐくまれて、いろいろな色彩と形體とにうつり變りながら、至純な心が生長して行く。空腹なる利己主義者の食欲は眞に驚くべきものがある。彼は盗人でさへもある。

手近いところで君の造語さへ時々失敬して居る。

手は遠くどこへでものびる。盗まれて怒る人と悦ぶ人がある。どつちでもかまはない。僕自身の肉が増えればそれでいいのだ。然しいづれ近い中に夫々のしをつけて御返しする時がある。

過去は闇黒だ。昨日は闇黒だ。今日のみが明るい。僕は何度青い鳥をつかまへたかわからない。恐らく今握つて居るものも、さうかも知れない。

だから自分は過去と未來を決して口にしない。現在のみをいふ。そして此の上もなく幸福だと言ふ。

おめでたいといふ人たちには勝手に言はしておく。眞實を曲げるよりも鐵の棒をまげる方がやさしい。僕にとつては盗みも眞實である。

併しみなさんは心配しない方がいい。狡猾な盗人はあらゆる財寶を奪ふけれども、魂だけはそつとしておく。慘酷な殺人者でも魂には手がつけれられない。盗みは手段である。勿論僕は出来るだけ自分で自分の食物をさがして居る。

併しそれでも足りないときは他人のものを盗む。實際、盗みは「時」の經濟でもあり便利でもある。そして僕は一日も早く成長したい。

併し今の世に僕の盗みたいものがあまりに少ないのを遺憾とする。つくづく考へれば貧乏人ばかりの世界である。即ち僕が盗むのは僕自身のリズムを完全に近く表現するための手段である。盗みのために盗みをするのではない。順つていくら飢えても豆腐のカラなどは食はない。

○

詠嘆以外に短歌なし。

人間に詠嘆的氣分が無くなるとき歌は滅亡する。人間に感傷が無くなつたとき詩は滅亡する。人間に眞實がなくな